

医療法人 芙蓉会 南草津病院

訪問リハビリテーション情報誌

みなりハ

第 12 号

発行日 2015. 1

皆さん、新年明けましておめでとうございます。初詣は済まされましたでしょうか？
皆さんそれぞれ今年の抱負を胸に良き1年を過ごして頂ければと思います。私ども訪問リハビリスタッフも、皆さんの生活をサポートする力になれるよう、より一層努力する1年にしたいと思いますので宜しくお願いします。

さて、今回の第12号は1年間を通してご紹介してきました、“つながるリハビリテーション”の最終章です。当院では南草津病院を退院された1ヶ月後に、訪問リハビリにつないだ利用者様のその後のご様子を、入院中に担当しておりましたリハビリスタッフに対して、ミーティングを開いて話し合う場を設けています。

また、必ずしも利用者様の全員対象というわけではありませんが、入院中に担当しておりましたリハビリスタッフも訪問リハビリに同行し、入院中に練習した内容が実際に自宅でしっかりと行えているか、振り返りの場を設けるシステムもとっております。

下の写真は退院されて1ヶ月後に行うスタッフ間ミーティングの様子と、院内スタッフによる訪問リハビリ同行の様子です。

来年度もこのような形で、当院の取り組みをご紹介し、皆さんに少しでもご理解を深めて頂けるよう努めて参りますのでよろしくお願い致します！



訪問チームから院内チームに向けて、退院後のご様子やリハビリで練習した内容が、実生活でどのように行われているかなどを報告し、話し合いの場を設けています。



入院中に自分が担当した利用者様が、リハビリで練習した内容を自宅でもしっかりと行えるか、実際に自分の目で確認するといった機会を設けています。

このように、当院では毎回担当させて頂いた利用者様を通じて学んだ経験を、今後の臨床に活かしていけるよう、振り返りの場としてこのような取り組みを行っています。

「自宅以外で関わる訪問リハビリの役割」

今回は〇〇市在住の A さんの事例をご紹介します。 A さんはデイサービスやショートステイサービス・訪問リハビリを利用しながら、ご家族様と一緒に自宅で生活されています。

訪問リハビリに伺ったある日、A さんが「どこに行っても同じような手伝いをしてもらえると有難いのに・・・」と言われました。お話を詳しく伺ってみると、A さんに関わる各サービス提供者が行う介助方法に違いがあるという事が分かりました。

A さんの場合は、車いす・ベッドやトイレでの乗り移りの介助において、各サービス提供者の間で介助する方法が異なっていたようです。介助する方法が異なっていたことで、A さんは乗り移りの際に痛みが助長され、我慢を強いられていたようでした。そこで A さんのケアマネさんに相談し、利用中のデイサービス施設でご本人様にも参加してもらい、施設スタッフの方々に介助方法を伝達させていただきました。トイレの乗り移り介助に関しては、最も痛みが少ない方法を施設スタッフの方と一緒に検討しながら実施させていただきました。

私たちリハビリ専門職が介助を行う際に考えることは、まず利用者様が安心して安楽に、そして安全に動作が行えることです。もうひとつは、できる限りご本人様の力を使ってもらうことです。少しでもご自身でできることがあればやってもらい、私たちは転倒しないようにいつでも手の届く範囲に位置し、不十分なところを補うように関わっています。 どのような些細なことでも、日々ご本人様の力を使っていただくことが、生活の中でのリハビリになると考えています。A さんに限らず他の利用者様においても、個人によってご病気やお身体の状態、家族構成や自宅など利用者様を取り巻く環境は様々です。また、施設は自宅とは異なり、介護・介助する人も様々です。

私たちは自宅で実施するリハビリだけが、訪問リハビリの役割であるとは考えていません。A さんのようにケアマネさんに相談した上で、必要性があればデイサービスなど自宅以外の場所にお伺いさせていただくこともあります。利用者様の個性を共有し、利用者様を取り巻くすべてのサービス提供者が同じ視点のもと介護・ケアしていく助けになればと考えています。

どのようなことでも構いませんので、ケアマネさんや私たちに気軽に相談してみてください。最初から全てを解決することは難しいかもしれませんが、お力になれることがあるかもしれません。

お知らせ

昨年度はお忙しい中、『訪問リハビリアンケート調査』にご協力いただきまして、大変ありがとうございました。ご利用者様・ご家族様からいただいた貴重なご意見を参考に、今後も、より一層充実したリハビリテーションを提供できるよう努力していく所存でございます。今後もよろしくお願いいたします。